

間接知覚論への親和性と向性との関連性

佐藤手織*

On the Relation between one's Affinity with the Theories of Indirect Perception and Personality

Taori SATO*

Abstract

The purpose of this paper was to examine the hypothesis that introverted subjects have a stronger affinity with the theories of indirect perception than extroverted ones because of their subjective cognitive-style. The results were supportive of this hypothesis. That is, introverted subjects showed the tendency of spontaneous thinking, understanding, and belief of two types of the theory of indirect perception more than extroverted ones.

Key words: affinity, theories of indirect perception, introverted/extroverted

背景

ここ20年来、Gibson, J.J. のユニークな生態学的視覚論 (Gibson, 1979) が我が国に広く紹介され (境・曾我・小松, 2002; 佐々木, 1994), その重要概念である直接知覚論への理解が深化するのに伴い、従来自明とされてきた知覚理論が「間接知覚論」として相対化され (河野, 2003; 佐々木・村田, 1994), それに対する種々の疑念が表明されるようになってきている¹⁾。間接知覚論とは文字通り「世界を直接 (ありのままの状態) 知覚することはできない」とする立場であり、現在の心理学における認知主義に連なる発想であるとされる。すなわち、物理的世界と知覚的世界との相互独立性を認める物心二元論と密接な関係を有し、物理的に記述されるデータと心理現象としての認識の間に何らかの情報処理過程としての知覚メカニズムを措定する考え方である²⁾。本節ではまず、「間接知覚論」という術語について、哲学者河野哲也 (2003) の記述に基づき、その内容を概観する。さらに、筆者の「異界」イメージの検討 (佐藤, 2004) に基づき、本稿の主要な検討目的を提示することとしたい。

河野 (2003) によれば、間接知覚論とは、古代ギリシャのプラトン派に端を発し、近代科学・イギリス経験主義哲学を経て、現代の計算主義・認知主義・表象主義まで連綿と受け継がれてきた知覚理論である。その発想の大略は、本来意味を持たないモザイク的な感覚要素に、推論・連合・想起といった、心 (・理性・脳) の構成能力による意味・秩序の付与がなされた結果として知覚が成立するという点である。この点に関して河野は、Gibson の思想の変遷をたどる中で、ゲシュタルト心理学についての重要な指摘を行っている。すなわち、ゲシュタ

ルト心理学の唱える「知覚のゲシュタルト」の考え方は、モザイク様の刺激作用が体制化処理を受けることによりゲシュタルトが形成されるとするものであり、結局は間接知覚論の一種に過ぎないという指摘である。また、間接知覚論が、先に述べた物心二元論や、日常的な事物が原子の配置に還元されるとする原子論的な実体論といった哲学的立場と関連が深いことについても言及している。

一方、筆者は先に、「異界」のイメージを構成する因子として「知覚的未分化」「理解不可能」が抽出されることを見出し、間接知覚論がわれわれのメタ認知 (暗黙の知覚観) となっていることの反映である可能性を考察した (佐藤, 2004)。この際、ロールシャッハ・テストにおける運動型・色彩型の区分とユングの内向型・外向型の区分との類似性を認める河合 (1986) の記述に基づき、間接知覚論の考えと対応する主観的な認知スタイルを強く有する内向型は、上記のイメージをも外向型以上に強く有するのではないかと仮説が検討された。検討の結果、一応の支持を得たこの仮説は、主観的な認知スタイルを強く有する内向型の被験者が、間接知覚論をメタ認知として暗黙の裡に強く有するというさらに仮説的な前提に基づいたものであり、この前提そのものの検討および被験者のメタ認知と「異界」イメージとの関連についての検討は今後の課題として留保されていた。本論では、これらの課題のうち前者、すなわち、被験者の向性とメタ認知との関連について検討することを目的とする。具体的には、「知覚的未分化」「理解不可能」それぞれの「異界」イメージに反映される2つのタイプの情報処理過程—① 知覚的分化: 本能や言語によるゲシュタルトの形成, ② 理論的解釈: 現象の背後の法則の認識—を、間接知覚論 I・II として区分・命名し、これらの考え方への親和性が特に内向型において高い可能性を検討する。

平成 21 年 1 月 5 日受理

* 基礎教育研究センター・准教授

方 法

調査の対象は、大学1~3年生の344名である。彼らは心理学関係の講義の受講生であり、講義時間を利用してアンケート調査が実施された。彼らには、調査の回答に先立ち、間接知覚論I・IIの内容が概説される。間接知覚論Iについては、まず、ユクスキュル(1934)の提唱する(心理現象としての)「環境世界」が生物種により多様であることを、彼の著作のイラストにより示す一方、カントの「物自体」の概念を援用しつつ、個々の生物種が属する(物理的な)世界が単一であると考えられることから、生物種に特化した、後者の世界から前者の世界への変換・情報処理がなされている可能性を示唆した。さらに、変換・情報処理の具体的内容として、本能・言語による世界の分化様式を説明した³⁾。一方、間接知覚論IIについては、フィクション(「ソフィーの世界」ヨースタイン・ゴルデル著(1991)・池田香代子訳(1995))に記載されている例え話(父親が浮遊しているシーンを見て母親は仰天するが、赤ん坊は驚かない)に加え、「マジックを観て驚く」「ドラマを観て『ありえない』と思う」といった現実的な事例を示し、日常の認識において暗黙の裡に働いている常識(論理)の存在に気づかせるようにした。専門用語や人名の紹介は必要最小限に止め、具体的な事例を中心に平易な言葉で説明するように心がけられた。その後、受講者は、淡路式向性検査と間接知覚論への親和性をチェックする調査に回答し、講義時間内に回答は終了した。後者は、間接知覚論I・IIそれぞれについて、「今までにそれらの考えを思いついたことがあるか?」(着想)「それらの考えがよく理解できたか?」(理解)「それらの考えが納得できたか?」(納得)の質問に4件法(1:明確な否定~4:明確な肯定)で回答を求めるものである。講義に集中していなかったと自覚する回答者には、結果の信頼性を歪める可能性があるため、あえて回答を記入しないように求めた。

結 果

調査対象344名中、データに欠損値のない305名を分析の対象とした。これらからさらに、佐藤(2004)と同様、向性指数の下位・上位それぞれ約20%分の被験者を抽出し、内向群(向性指数 ≤ 82 , 61名)・外向群(向性指数 ≥ 124 , 60名)とした。間接知覚論I・IIそれぞれに対する親和性の評定値平均を各群について算出し、図1・2に示す。これらの値を従属変数として、3要因(被験者間1:向性(内向, 外向), 被験者内2:間接知覚論(I, II), 間接知覚論への親和性(着想, 理解, 納得))の分散分析を実施した結果、向性・親和性の主効果が有意であった(前者は5%水準, 後者は1%水準)。さらに後者に関する多重比較(Ryan法)の結果、着想の評定値が理解・納

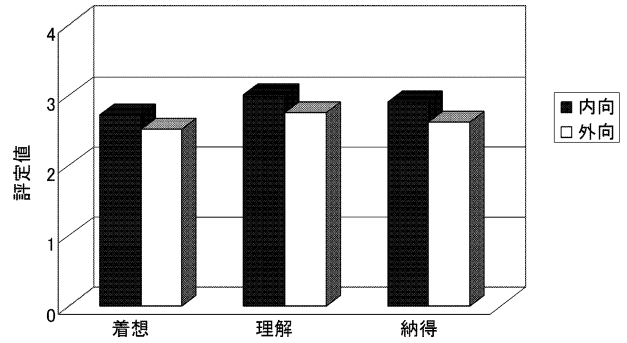


図1 間接知覚論Iへの親和性と向性との関連性

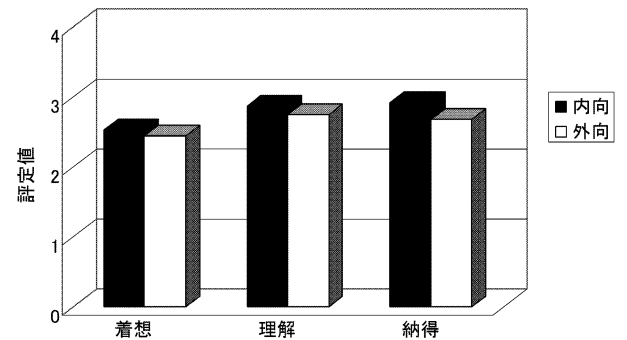


図2 間接知覚論IIへの親和性と向性との関連性

得の評定値を有意に下回った(ともに1%水準)。

考 察

分散分析の結果、本研究の主要な関心事である、間接知覚論への親和性と向性との関連性については、内向型の回答者が、間接知覚論I・IIいずれに対しても、外向型以上に親和性が高いことが示された。これは【背景】で示された仮説と一致する結果であり、思考・想像を中心とした内面生活を重視し、主観的な認知スタイルを強く有する内向型が、物心二元論を前提とした知覚の情報処理の考えを主要内容とする間接知覚論を容易に理解・納得し、また自らその着想に至る可能性も高いことをうかがわせる。一般に、新奇な考え方に対する親和性は外向型においてより高いと考えられ、この点を考慮すれば、内向型の間接知覚論への親和性がさらに強調される。したがって、佐藤(2004)で示されたように、「知覚的未分化」「理解不可能」の「異界」イメージが内向型において強いのは、彼らの間接知覚論への親和性、すなわち、メタ認知の反映である可能性が改めて確認された。

間接知覚論への親和性については、分散分析の下位検定の結果、間接知覚論I・IIの着想が、理解・納得と比較して困難である点が示された。この知見は、自発的である着想は、受け身的な反応である理解・納得と比較して達成困難であるためと考えられるが、この考察が正しけ

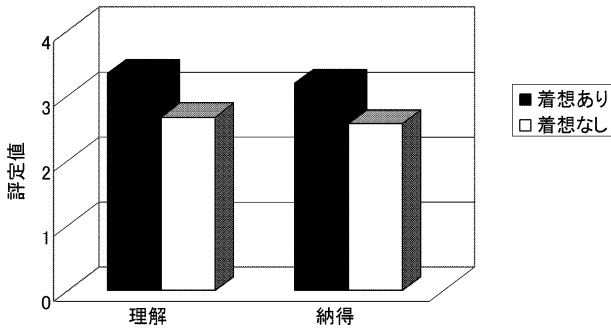


図3 間接知覚論 I に関する着想の有無と理解・納得との関連性

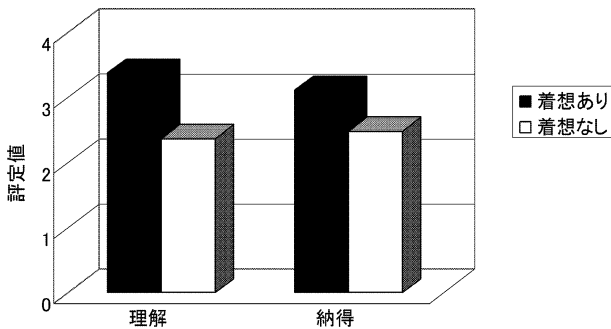


図4 間接知覚論 II に関する着想の有無と理解・納得との関連性

れば、間接知覚論の着想経験がある回答者は、理解・納得の程度もより高いとの仮説が成立する。この仮説を検討するため、着想経験の有無と理解・納得の評定値との関連を示したのが図3・4である。分散分析の結果、間接知覚論 I・II いずれに対しても、着想経験ありと回答した被験者ほど理解・納得についても高い評定値を示しており、上記の仮説を支持する結果となっている。また、この結果は、被験者の回答態度に一貫性があることを示しており、データの信頼性を一定程度保証するものとも言える。間接知覚論のタイプによる統計的な有意差は、着想・理解・納得のいずれの評定値についても見られなかったが、着想に関しては、「はっきりあると言える」(評定値 4)「はっきりないと言える」(評定値 1)の回答率の合計が間接知覚論 I においてより高く、回答者の確信度が高い傾向がうかがわれた (I: 34.4%, II: 22.9%)。このことは、間接知覚論 I が、間接知覚論 II と比較すると日常的な常識と乖離した内容であり、そのため自らの着想経験の有無について回答者が明瞭に判断しやすいためではないかと考察された。

総括と今後の展望

本論の検討結果を以下に要約する。

- (1) 内向型の被験者は、外向型以上に、間接知覚論への親和性が高い。すなわち、自ら着想する確率が

高く、説明された場合の理解・納得も容易である。

- (2) 本論で想定された2種類の間接知覚論のうち、「理論的解釈」よりも「知覚的分化」に対する回答の確信度が高く、後者の内容が日常の常識と乖離しているためと考察された。

本論の検討は、佐藤 (2004) で留保されていた2つの課題の一つに着手したものである。残る課題、すなわち、間接知覚論への親和性と「異界」イメージとの関連性についても、検討を続けたい。また、本論の調査実施に際しては、間接知覚論を、物心二元論を前提として導かれる、物理的世界から心理的世界への変換・情報処理を想定した知覚メカニズムの理論として説明してきたが、逆に、物心二元論を間接知覚論からの帰結と見なすような哲学者の記述も散見される(河野, 2003, pp. 27-28)。本論では、この点に関しての概念整理が不十分であり、今後の検討を通して、物心二元論・情報処理モデルのいずれが内向型にとって本質的であるのか等を明らかにしていきたい。

注

- 1) Gibson 自身は、1979年の著作において、「間接知覚論」という術語ではなく、「感覚を基礎とする知覚の理論 (sensation-based theories of perception)」(古崎他訳) という術語を用いている。
- 2) 境・曾我・小松 (2002) によれば、間接知覚論は「知覚のメカニズムの記述」であり、直接知覚論は「動物と環境の関係についての記述」である。両者の差は、知覚観のカテゴリカルな相違なのであるが、この点についての理解不足から、直接知覚論を「知覚のメカニズムの記述」として間接知覚論と同列に論じ、批判するという誤りが生じやすいとされる。
- 3) 「本能・言語によるゲシュタルトの形成(分化)」の説明は、市川浩(1993)の「身分け」、丸山圭三郎(1984, 1987, 1991)の「言分け」の考え方に大きく拠っているが、これらの考え方は、ゲシュタルト心理学よりはむしろメルロ・ポンティのゲシュタルトの考え方に近く、基本的には間接知覚論のアンチテーゼである(また、ユクスキルの「環境世界」の考え方も、丸山は「身分け」と同一視しており、同様のことが言える)。

我々人間にとって、森羅万象は常に何らかの意味を担った現象すなわち〈意味=現象〉として現出していることは確かなように思われる。またこの〈意味=現象〉は、まず意味をもたぬ対象が知覚され、ついでこれに何らかの意味が付与されるといったものではなく、知覚されるものは同時に意味であり対象であって、この二つが不可分離であることも確かであるようだ。我々にとっては、端的に〈意味=現象〉以外の事象は知覚されず、存在しないと言ってよいだろう。ここで言う意味とは、単に言語的なもの(=語彙の意味と機能的意味)を指しているのではない。現に我々は、名も知らぬ事物を認知し、意味のわからぬ物音に反応する。言語としての意味をもたぬ雑音も、(中略)人間にとっては立派な〈意味=現象〉であるために聞かえていることを忘れてはなるまい。(丸山, 1991, pp. 101-102)

したがって、これらの考え方は、間接知覚論の説明とし

ては本来不適切と言えるが、これらが間接知覚論と混同されやすいことを丸山自身が認めていることは、上記の引用を含めた彼のさまざまな記述からも明らかであると考えられるため、調査対象者の理解可能性に鑑み、説明に使用した。

引用文献

- Gaarder, J. (1991) *Sofies Verden*. H. Aschehoug & Company. 邦訳 (1995) 『ソフィーの世界—哲学者からの不思議な手紙—』 池田香代子訳, 日本放送出版協会
- Gibson, J.J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. 邦訳 (1985) 『生態学的視覚論』 古崎敬他共訳, サイエンス社
- 市川浩 (1993) 〈身〉の構造 講談社学術文庫
- 河合隼雄 (1986) ユングのタイプ論に関する研究, 心理療法論考, pp. 317-340. 新曜社 (初出 (1982) 京都大学教育学

部紀要 28)

- 河野哲也 (2003) エコロジカルな心の哲学—ギブソンの実在論から 勁草書房
- 丸山圭三郎 (1984) 文化のフェティシズム 勁草書房
- 丸山圭三郎 (1987) 言葉と無意識 講談社現代新書
- 丸山圭三郎 (1991) カオスモスの運動 講談社学術文庫
- 境敦史・曾我重司・小松英海 (2002) ギブソン心理学の核心 勁草書房
- 佐々木正人 (1994) アフォーダンス: 新しい認知の理論 岩波書店
- 佐々木正人・村田純一 (1994) アフォーダンスとか何か (対談), 現代思想, vol. 22-13, pp. 262-293. 青土社
- 佐藤手織 (2004) 「異界」のイメージを分析する, 八戸工業大学紀要第23巻, pp. 151-160
- Von Uexküll, J. & Kriszat, G. (1934) *Streifzuge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*. Berlin: Springer. 邦訳 (2005) 『生物から見た世界』 日高正隆・野田節子共訳, 岩波文庫